

甚多し閉塞隊員の收容に従事したる水雷艇隊及驅逐隊は風濤と戦ひ敵に抗して能く其任務を盡し特に水雷艇隊は港口に接近して閉塞隊員の約半部を收容せり此難事業中第六十七號艇は敵弾にスチームパイプを破られ負傷卒三名を出し敵前に於て進退自由を失ひしが其僚艇七十號之を救助して携航せり又蒼鷹も敵弾に左舷機を傷けられ卒一名戦死し隼にては下士一名戦死せり其他驅逐艦水雷艇には一も損傷なし第三戰隊は三日午前二時第一戰隊は午前九時旅順口外に達して驅逐隊水雷艇隊を掩護し午後四時まで各方面に別れて閉塞隊員の搜索收容に盡力せしが遂に得る所なし此日濠氣頗深く爲に敵状を見ること能はず夜に入り我艦隊は各其集合地點に引あげ四日朝より更に豫定の行動を續行せりといふ嗚呼何を壯にして且慘なるの甚しきや

さて又韓境に於ては是より先き露兵若干楚山渭原より江界郡を経て長津郡に來到せしが此兵の更に南下したりしにや七日午後四時露騎兵七百餘名寧遠より徳川に入り軍糧馬秣を徵發して暴舉に出でしを以て人民多くは散亂し翌日正午より价川に向ひ婦女を姦し財貨を奪ひ吏を捕へ民を毆打し遂に安州に向

ひたりしが其安州來襲の委曲は十日午後十一時五十分及十一日午前九時五十分安州發山田兵站司令官の公報によりて知られたり即ち該司令官は一小隊の増援隊と共に十^〇午後一時安州に着し戦闘中なる安州守備隊と共に戦闘線に加入したり露兵は騎兵にして約三百以上也我死傷者は此日の朝より午後七時に至る間に戦死四名負傷六名彼の損傷は二十以上而も前面の露兵は未だ退却せず^{山田司令官}十日の報告十一日午前六時彼は退却を始め价川及順川方面に赴けるものゝ如し此兵はコサツク騎兵にして隊號は明かならず我は追撃隊を出して之を搜索せり彼の死傷は五十名以上に達し捕虜下士一名あり其言によれば彼は五百名なりといふ午前六時三十分嘉山及肅川より増加隊として將校の率ゐる部隊到着せり^{同司令官}十一日の報告

更に其後の公報によるに安州を襲ひし露兵の死傷五十餘中戦死者將校一下士二卒十は日本軍に於て慥に之を認め而して捕虜に下士以下二名あり戦利品は軍刀小銃馬具其他多數あり捕虜の言によれば彼はマンドリトフ氏の指揮に屬するコサツク騎兵第十五聯隊にして遼陽まで鐵道によりて輸送せられ同地

にて下車し日々十里以上の行程を以て楚山价川を経て安州に進みしものなり
彼等の半数は日本と戦ふを嫌ひ士氣揚らず糧秣は十二日分を携へ來れるも其
他は掠奪せしものなりき

十二日發の元山電報は鏡城の露兵は一百五十名内外なるを報じ而も此等の
露兵は切に南下せむと唱ふるが故に北青以北の人心恟々として堵に安んぜず
鏡城附近は食物不足なるが上に露兵の掠奪にあひ人民の大半は散亂し日本居
留民城津より引揚げし後は元山と北境との船便杜絶したりといへば咸鏡道の
民情亦察するに餘ありといふべし

滿洲に入りし日本陸軍の一部隊は五月七日寬甸縣を占領し他の一部隊は同
十一日雪裡店より退却せし騎兵を追撃し中尉一名兵二名を捕虜とし黒木大十
將報告
二日大窰口方面大連灣に於ける活潑なる掃海は片岡第三艦隊司令官の報告と
なりて發表せられぬ是によれば十二日午前七時四十五分艦隊大窰口沖に達し
て開列し嚴島日進宮古は陸上の威嚇砲撃を行ひ第二第六第二十第二十一の四
水雷艇隊は海面の掃海を開始せり第十二水雷艇は十一日夜旅順港口封鎖に従

事し今朝入時半大窰口外に來會し直に測量に従事し其間煤洋附近に現れたる
露の歩兵約一中隊騎兵約五十を砲撃々退せしに彼は二三の看視哨を止めて我
動作を窺ふものゝ如くなりしも敢て發砲せざるを以て午後三時無事測量を結
了せり第四十七、第四十四の兩水雷艇は大窰口内西岸に沿うて敵情を偵察し
つゝ掃海を行へり然るに大孤山半島八百三十呎山の背北西山麓を通過せる電
線を發見したるを以て砲撃援護の下に海軍少尉堀田文雄氏下士卒四名を率ゐ
て艇用端舟にて上陸し電柱五本を破壊し其電線を奪ひ還れり大孤山の麓に二百
九十五徐家山方面に一百尙其内方に一千の露兵あることを土民より聞知し煤
洋の東方約二千五百米突に進行せしに徐家山と五百五十呎山との中間より歩
兵約二百現はれ前進し來れるを以て其近接を俟ち砲撃せんとせしに彼は海岸
を距る數百米突の地物によりて前進せず暫時にして騎兵十一煤洋の西南方約二
百米突に現はれたるを以て之を砲撃逃走せしめたり我に損傷なし宮古艦は深
灣に進入しロビンソン角の西北八百呎山にて彼の哨所あるを發見し之を砲撃
破壊したり彼は其後方に約十哨隊伏在し居りたるも共に狼狽遁走せり第四十

入第四十九兩水雷艇は大窪口東岸に沿うて掃海中午前八時黒嘴子の南西八鐘の地に於て機械水雷を發見し百方之が爆沈に努めしも其効果なきを以て艇を後退せしめ更に爆沈を試みんとして作業中正午過二十七分該水雷艇が俄然猛烈なる爆發をなし爲に四十八號艇は兩斷し約七分時にして沈没の不幸を見るに至れり各艦は直に救助艇を出し附近にありし水雷艇と共に其救助に盡力せしも遂に十四名の死傷者を出すに至れり黒嘴子と砂蛇との結合線上に於て前記の外尙機械水雷を發見し之を爆沈せり艦隊は午後六時一先づ作業を中止し集合地に歸航せりといふ

此第三艦隊は十四日大連を砲撃し無事陸兵を上陸せしめて市街を攻撃し又第二軍は十六日より旅順攻撃を開始せりといひ旅順港内には去六日以來時々爆聲を聞くととの東郷司令長官の報告に徴するも金州半島の南角には今回の戦争に一段落を與ふべき大事件の起れるを了知するに足れり是時に當りて大窪口沖に於て再び探海の續行せらるゝと同時に宮古艦沈没せりとの報知は人を驚かせり片岡第三艦隊司令長官の報告によるに第五戰隊第二水雷艇(四十五號

を欠く)は五月十四日早朝大窪口沖に至り我艦隊掩護砲火の下に聯合探海艇隊を放ちて探海を續行せり露兵は去十二日ロビンソン角九百呎山の高地にありたる看視所を撤退したるものゝ如くなりしも大孤山北東六百呎山の北東側に新に假設砲臺を急造し野砲約六門を備へたり又同山の東北に掩堡を設け歩兵約一中隊を配置する等應急の防備に努めたるものゝ如く終日頑強なる抵抗をなせり此探海艇隊は終日機械水雷敷設面内にありて敵の砲火を冒し克く其任務を遂行し水雷五個を破壊し又我艦隊の砲火は陸上の露兵に多少の損害を被らしめたり然るに午後四時三十五分作業を中止し探海艇を收容せんとするに當り彼の機械水雷不幸にも宮古の左舷船尾に觸れ轟然爆發して艦體に大破損を被らしめ死傷者二十四名内戦死下士卒二名を出し艦體も亦二十三分時の後沈没するに至りし也

又かの安州に敗れし露兵の動靜を聞くに彼等は戦死者三十餘名を埋葬せる外負傷者十四名を伴ひ十一日价川に入り四名は二十一日德川に赴き十四日悉く寧遠に走れり彼等は到る所に韓民を脅迫し負傷者及荷物を負はしめ加之錢

穀を掠奪し什器を破壊し徳川にて婦女の辱められし者二十餘名あり韓民は日本兵の有力なるを賞讃し露兵の懼るゝに足らざるを了解せり十七日平壤日本領事館分館より告の報而して露兵擊攘の目的を以て安州及寧遠より派遣せられたる木下大隊は十五日价川に着せしが露兵は道路橋梁を破壊し大隊の到着に先だちて已に寧遠に退却せるを以て大隊は續て寧遠に前進せり沿道の韓民は露兵の暴虐を慨し喜で日本軍を迎へ大に便宜を與へたり十九日東京の日本軍の報告

既にして日本軍金州を占領すとの芝罘電報あり次て發表せられたる大本營の公報は詳細の實況を知悉せしめたり即ち日本の上陸軍は五月九日遼東半島に上陸を開始し交通機關を遮斷し其一隊は十六日午後〇時三十分より十三里臺金州の東附近の露兵を攻めて之を南方に擊退し午後三時四十五分九里庄金州の東北約一里北方高地より陳家屯金州の東約一里半に渉れる高地を占領し露兵を金州附近に壓迫せし也

一方に於ては日本軍岫岩方面に進行せりと思しく岫岩の露兵は糧秣を焼き退却せりといひ十六日には已に日軍蓋平を占領し露兵は武器を捨てて敗走

し救援の爲營口方面より前進したる露兵も大石橋に至りて敗兵に會して潰散せりとの東電あり而して日本の本國に於ては軍費供給の爲桂總理大臣は十八日其官邸に東京、都大阪横濱神戸の實業家を招き公債募集の懇談をなせり恰も此十八日は韓國に於ても最注意すべき事件ありし日にして即ち露韓兩國間の條約及協定が全然此日を以て廢棄せられたりし也

第二 日韓當局者の交渉及日本人増加の影響

四五月の交日本の要求にかゝる平安黃海忠清三道の沿海漁業權は韓廷に於て承諾を喜ばず中樞院は之に關する議事を開て之を否決し議政府會議に於ても踟躕して決定に至らず五月十七日の同會議に提出せられしも猶決定せず或は可決せられたりといひ或は可決の内議熟せりといふが如きは何れも誤傳に過ぎざりき今其會議に提出せられし請議書の内容五月十八日朝鮮新報掲載を見るに日本公使が平黃忠三道沿岸の漁業權を他道の例によりて准許し韓國の收入を増し日本軍の副食物を得るの道を開くべしとの要求は勢ひ容れざる可からざらばも事重大なるを以て政府會議に提出すといふにありて農商工部大臣金嘉鎮外

部大臣李夏榮兩氏の連名せるもの四月十日なりしが十七日の會議には未だ金嘉鎮氏の調印なかりしを以て決定せず而も不日別勅を受けて連署すべく結局或期限と韓人の漁業を妨げざる條件とを附して異議なく通過するならむといひしも遂に久しく決定に至らざりき

此頃日本人に對する賊警頻々たり四月二十五日忠清道京釜鐵道會社下里派出所附近の溪間に於て賊徒は一人の日本人を傷け二十七日夜梧柳洞に草賊闖入し救援に赴ける日本人に發砲して其跡を晦まし五月四日忠清道永同を去る約一里の處に於て日本人一人は殺され十日午後京仁鐵道線路なる素砂附近に草賊出沒せるを以て憲兵巡查は之が逮捕に従事し東學黨の或者は日本の鐵道及軍隊に危害を加へむとの誓約を爲せるは事實なるが如く京釜鐵道線路太田方面に蜂起して鐵道を破壊し工夫韓人に同盟罷工を煽動せんとする色ありとて會社は之を公使館に内報し十二日漢城釜山兩方面より鐵道守備兵若干派遣せられ此守備兵分遣隊は永同沃川燕岐木川に屯在すべしといひ同日全羅道全州觀察府に於て東學黨の巨魁四名を捕縛せりとして其處分を政府に稟請し來れり

漢城は開戰以來一時混亂の巷となり惡疫蔓延の憂なしとせず加之韓人の衛生思想に乏しき城内の不潔甚しきを以て駐在日本軍司令官陸軍少將原口兼濟氏は軍隊衛生の必要上清潔法實施に關し日本公使と協議したる結果公使は一般衛生の爲にも清潔法實施の急務なるを認めて之を外部に勸告し日韓兩國官吏協力して之に任ぜむことを申込み而して其内容の大要は(一)溝渠を疏通し(二)塵芥を城外に棄て(三)糞尿は溝渠に放流せず(四)各家糞桶を造り町内に公衆便所を設置し(五)費用は韓國政府と日本居留民役所とに於て之を分擔せむといふにあり韓廷亦其勸告を是としたりしが内部は日本の手をからず自ら專管施行せんことを外部を経て日本公使に照會したれども公使は協同施行を可とする旨を回答し十四日公使館員は内部官吏と會合して協議せり

原口少將は又司令監部設置につき適當の公廨を得むことを提議し日本公使館より之を外部に照會の末韓廷は侍衛第一大隊營舎を之に充つることに決しぬ此頃韓國の時弊改革問題又人口に上り日本公使は謁見の際好意的上奏をなせりといひ月の初旬より易者卜者其他挾雜輩は宮中に出入するを禁ぜられ内

官は罷免となり謁見は大臣協辦承候官等に限られ宮闕の肅清は漸く緒に就かんとしぬ十日午後二時議政府會議將に開かれむとする時突如として韓皇の勅は下れり其大要にいふ政府諸臣因循姑息事務停滯し百政舉らざるは慨嘆に堪へず須く反省精勵悔あるに至るなかれと參政以下各大臣は恐懼して辭疏を上れり然れども韓皇は徐々に優批を下して職に居つて將來を戒むべきを諭し漸次大臣の登省を見るに至りたれども中には再疏を上る者あり又學部大臣閔泳煥氏の如きは別莊に引籠りて遂に出勤せざりき

月の中旬日本公使は韓廷に照會して曰く貴政府に於て外國人を顧問等に聘用するか又は其續約をなす場合には豫め先づ本公使に聲明するを好しとすとこれ誠に日韓協約上穩當なる事にして而も韓廷に於て往々其の軌を脱せむとする傾ありしが今や韓廷は之を諒とし敢て違はざるべきを誓へり

屢流會となりたる議政府會議に提出せられつゝある議案は二三の重大なる事件を包含せり即ち日本の漁業權要求問題の外京義鐵道敷設權を戰後日本より回收するの問題并に清韓移民の争地たる間島に清韓兩國の國境を勘定する

の問題是也もと京義鐵道は軍用鐵道として日本軍隊の經營せるものなるが故に日露交戰結局の後は韓國に還附するの契約を訂立せむとて外部大臣李夏榮氏は之を議政府に提出したるものゝ如く或は外界の反對によりて之を撤回せりとの説あるも未だ信ずべからず間島は白頭山の南豆滿江の北にあれども其廣袤範圍すら判然たらず嘗て定めし清韓の舊界湮滅し爲に兩國民雜居して葛藤を生じ易ければ先づ官吏を派遣して舊界を考檢し清國政府に照會して會同協定せむとし慶興監理兼烏港通商事務官黃祐永氏の意見書を添へ内外兩部大臣より議政府に提議せるなり

十六日報聘大使李址鎔氏の一行日本より歸來せり而して氏の名聲の嘖々たると共に之に嫌焉たらずして反對の色を顯す者も出てぬ李氏は歸後緘黙を守り勢に乗じて衝に當ることを避けしものゝ如くなるはさすがに其身を保全するに敏なる韓人也十八日議政府は秘密會議を開けり一の最重要なる案件を李外部大臣より提出せられたり即ち露韓兩國間に締結せられし條約及協定を全然廢棄するの議なりしが韓皇之を嘉納し即時御前會議の結果十九日の官報號

外は十八日附の勅宣書を公布せり其内容は左の如し

- 一 既往の露韓兩國に締結したる條約及協定は總て廢棄し全然無効とす
- 一 露國臣民若くは會社に許可したる特許條約中今尙其期限内にあるものは韓國政府に於て妨なしと認むるものに限り之を繼續するも豆滿江鴨綠江鬱陵島の森林伐植の特許は元來一個人に與へたるに實際は露國政府自ら之を經營し特許規定に遵はず侵略的行爲をなすが故に該特許を廢棄し全然無効とす

余輩は實に敵を以て敵を制するに妙を得たる韓人の手際に感服せざる能はざる也

此頃日本人の渡韓する者益夥しく而して農事經營は當時の流行語となり京釜鐵道沿路は多くの日本人の資本を吸収したりしが最人の注目點となれるは全羅道錦江の流域なり是に於て乎該江流の海に注ぐ所に位せる群山港は農事經營者の集合地ともいふべく已に其地に土地を有し農業の改良を圖らんとする者は群山農事組合を組織するに至れり組合長中西讓一氏が後日明治三十八年一月

十四 余輩同志の韓國研究會に於て談話せし所によるに半島中の一等地たる全羅の地は水田無慮十萬町歩日本内地と等しき收穫を得るものとせば玄米二百五十萬石を産出すべきに弊政は沃野をして荒廢に委せしめ實際の産出かくの如く饒多ならず租税は一反歩に付平均七拾九錢八厘にして其他何等の課税なしと雖地方官の誅求の爲農民困憊せざるなし又此租税は日本の地租地價百分の二半に比して低廉なるが如くなるも是れ單に面積上の觀察に過ぎずして收穫より打算せば毫も低廉といふを得ざる也何とならば一反歩平年の收穫九斗にして米價日本より安きこと約二割なれば差引七斗二升の收穫に該當し之に對する税金八拾錢なるを以て也

同地方に於ける土地賣買は盛にして媒介者も甚多く詐偽亦其間に行はる水田の價格上田一斗落約二百坪但し處葉錢四貫文乃至五貫文一圓六十錢中田二貫五百文乃至三貫五百文下田二貫文以下一貫五百文通計平均三貫文也小作法に二種あり一を「オウリ」といひ地主と小作人と收穫を折半するの法也一を「トチ」といひ地主は收穫額の三分の一を取り小作人は三分の二を取る此場合に於て

は租税其他の入費盡く小作人より自辨する也實際此法を便とするが、かゝる韓農夫の耕作を以てして、平年作一反歩の收穫平均糶一石七斗にして、米質は日本の中以上に居る

此收穫が資本に對して幾何の利率に當るかは研究すべき問題也土地購買に要する經費は一反歩の價約七圓五拾錢世話人の口錢約四拾錢丈量其他の入費約二圓五拾錢合計約十圓にして是より獲得すべき收入は糶一石七斗の三分の一所謂トチに即ち約六斗なれば之を玄米にして三斗其價格大坂の相場を以て三圓なりとす而して糶を玄米となして大坂に輸出する經費三斗玄につき九十七錢五厘を要するを以て之を三圓より控除する時は殘額二圓二錢五厘にして是れ即ち十圓の資本を注きたる一反歩の純益なるが故に約二割の利率也

さて群山地方の最不便とする所は船便の不充分なるにあり日本と往來の汽船は木浦には寄港すれども群山には然らず群山に赴くには仁川より更に小汽船に貸せざる可からず而して商船會社の瑞鷹丸は此需要に充てられ紀伊川丸は仁川鎮南浦間の航路を往復しつゝありしが開戦以來日本に小汽船の必要遽

に増したるが故に此等の船舶も日本へ回航のまゝとなり不便少からざるを以て商船會社は海上の安全となるに及び再び航路を恢復せんとし五月九日瑞鷹丸は仁川に回航せられ紀伊川丸も亦中旬を以て仁川に來着し航路を龍岩浦まで延長すべく決定せられたり

「韓國經營」の語は甚しく日本人の名利心を衝動し空望を抱いて渡韓する者商品を齎らして渡韓する者の外に商業會議所の視察員府縣及各團體の派遣員等前後踵を接して雜然として半島に入り就中農業の調査は其主要なるものたりしこと前に一言せし所の如くなるも一定の土地所有權もなく何等登記の制もなく地券の不確實にして習慣の差違ある等は資本家をして躊躇せしめしことも鮮からざりき而して漢城の日本人街は旅宿の昌榮其極に達せるも軍隊の通過往來の頻繁等は惡疫の流行を豫想せしめ而も財團の不完備なる未だ適當の避病院をも有せず清良の飲料水をも得る能はざるに人口は非常の速度を以て増加し從來の泥甌道は一寸の餘地なく南は南山より北は明洞竹洞に溢れ東は筆洞より西は南大門停車場に連續し地價の昇騰實に甚しかりき

日本軍は已に韓境を離れて北進し韓語通譯の必要を感せざるに至りしかば韓人の通譯四十餘名は八日安東縣に於て解備せられ又京城第一野戰郵便局も十四日限り閉鎖して京城郵便局に合併せられ仁川兵站部は漢城に移動せられたり斯くて交戰の結果巨万の金錢軍隊の通路に落ちたるが故に韓人の購賣力増加し典當局は不振に陥れり又航路の頻繁なるに従ひて燈臺の増設其必要を生じ巨文島を始め凡十個處に之を置くの豫定なりと聞きぬ

日露間の韓國終

明治三十八年十二月十日印刷
 明治三十八年十二月十四日發行

日露間の韓國
 著作權所有
 金三拾五錢

著者 幣原 坦

東京市日本橋區本町三丁目八番地

發行者 大橋 新太郎

東京市牛込區市ヶ谷加賀町二丁目十二番地

印刷者 飯田 三千太郎

印刷所

東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目二十番地 秀英舎第一工場

東京日本橋本町
 發兌 博文館

在大學院文學士淺井虎夫君編

(東京博文館發行)

支那法制史

全一冊

特製	金五拾五錢	郵税	金十錢
並製	金四十錢	郵税	金八錢

本書は支那の法律の歴史的發達を記述するものにして支那國民の特質は本史を研究するに於て最も明瞭なるを得べし、今や支那に對する各種の調査追々進捗するも獨り法律の發達に關する研究に甚だ疎なり、蓋し本邦古代の法律は多く支那より出づるを知て然も其關係如何を知らず遂に其母法を極めざる結果誤解を敢てして毫も顧みざるものあり、是れ著者が研鑽の傍ら之を論述せられし所以なり讀者之によりて彼我國民の特性を知り之を日本古代法制に比較し更に歐洲の法制に對比し其長短特質を極め得ば以て他日有爲の活動に資する所大なるべし

白國
河府共
文次種
學次種
士郎德著
君君

支那文明史

全一冊
特製金五十五錢
並製金四十四錢
郵税十錢
稅八錢

支那文明を調査するに支那の學者が浩瀚の書史を備へて往々其問題に解釋を加ふる如き時なきにあらざるも皆一定の系統組織を立て、解釋を試むるものに非ざるが故に却て歐羅巴の文明を認明するよりも更に困難を感ずる所著者の苦心知るべきなり而して本書は古今東西の學者が未だ道破せざる所未だ思慮の及ばざる所を指摘して天下の支那學者を驚倒せしむるに足る蓋し支那調査に於て裨益する所少なからざるべし

東京博文館發行

笹川
文種著
學種著
士郎君

支那文學史

全一冊
特製金五十五錢
並製金四十四錢
郵税十錢
稅八錢

支那は東洋の古國にして、特に其文學は日本文學の鼻祖として、苟くも日本今日の文學を研究せんと欲するものは、必ず支那文學の發達沿革を玩味して、今日文化の淵源する所を知悉せざる可らず、本書は時代に依り、種類を分ち各種文學の由來變遷を説明すること、精透到れりと云ふべし。

東京博文館發行

文學士中内蝶二君著

(東京博文館發行)

支那哲學史

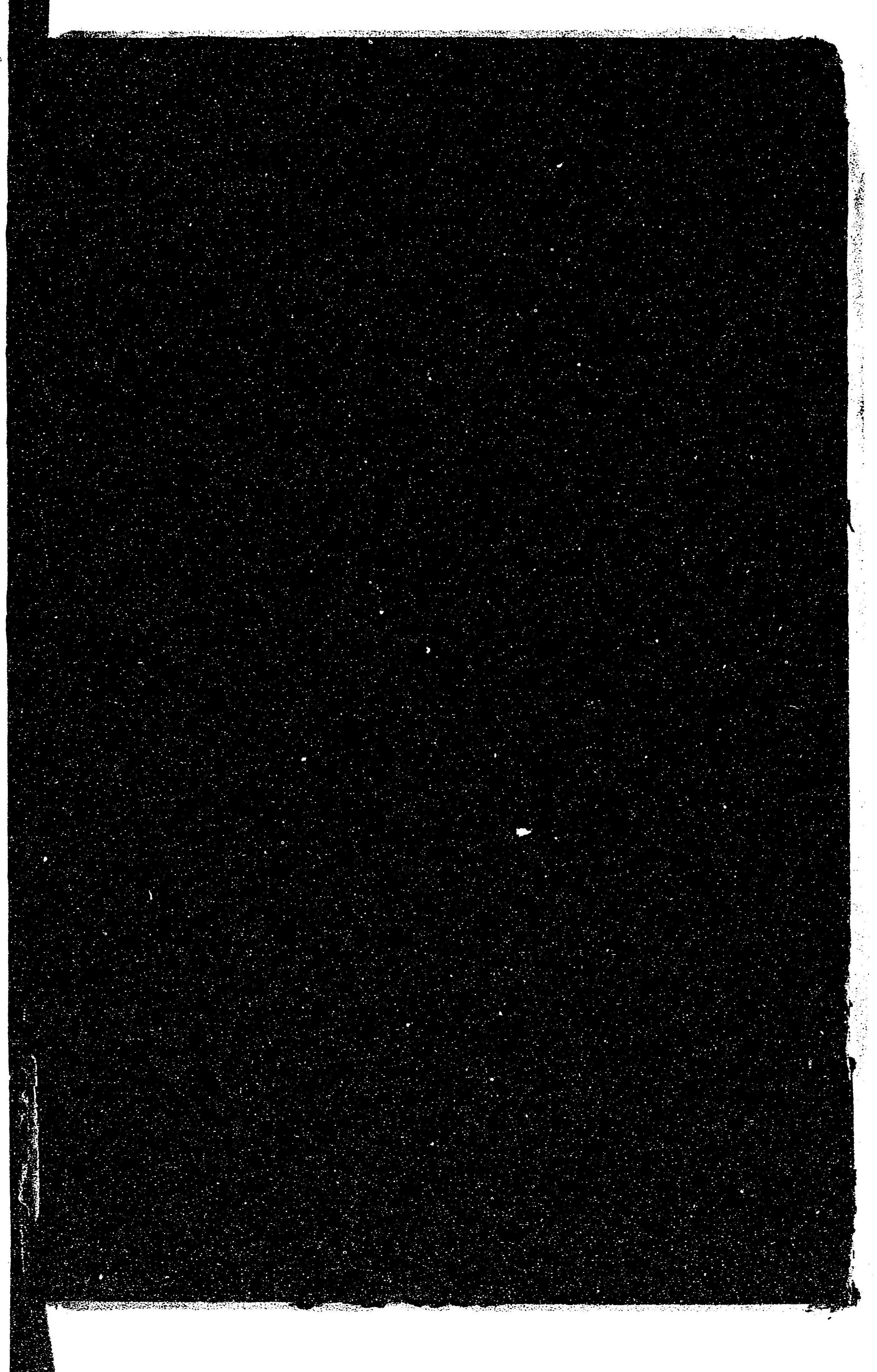
全一冊

特製	金五拾五錢	郵税	金十錢
並製	金四十錢	郵税	金八錢

上下茫茫四千載就中周王と宋代との如き思想運動の最も活潑なりし時にして諸家雜出燦として秋旻の星の如く甲論乙駁姑らくも歇まず其多趣にして變化に富める之を歐西哲學界の現狀に比して甚だ遜らざるものあり支那哲學史の撰述固より容易ならず刻下の世其書二三之なきに非ずと雖も未だ其善を稱するを得ざるもの比々として皆是なり。本書は中内學士精勵苦心の餘になりしものにて繁簡正に其當を得巨細概ね網羅し盡し殆んど間然すべき所なし好學之士之に據りて坤輿の平面に獨創の文化を開展したる東亞ツラン人種精神的生活變遷の一斑を知悉するを得るに庶幾からんか



84
235



029570-000-9

84-235

日露間之韓国

幣原 坦 / 著

M38

BAG-0117



